

日本と欧州文化首都（European Capital of Culture, ECoC）の交流  
欧州文化首都 2014 リガからの報告

# European Capital of Culture, ECoC 2014 Riga Report on a Collaborative Exchange between Japan and the European Capital of Culture

Supported by:

EU-Japan Fest Japan Committee

European Capital of Culture 2014 Riga

International Paper Object Festival, Riga 2014

Kuldīga Artists' Residence

**Youkobo Art Space, Tokyo**



# 日本と欧州文化首都（European Capital of Culture, ECoC）の交流

## 欧州文化首都 2014 リガからの報告



### もくじ

#### まえがき

欧州文化首都と AIR 活動

村田達彦・遊工房アートスペース

#### 欧州文化首都 2014・リガ

紙の幻想－和紙による彫刻がリガの都市景観を変える Paper Object Festival

文化交流の「窓」

ペーパー・オブジェ・フェスティバルに参加して

クルディーガ AIR 壁画プロジェクト

クルディーガ・アーティスト・イン・レジデンス

Una Meiberga、International Paper Object Festival, ECOC 2014 Riga 主宰

柳井嗣雄、美術家・和紙造形作家

矢嶋一裕、建築家

Ilze Supe、Kurdiga Artists Residence マネジャー

鍵岡アンヌ、美術家

#### 付録

参加作家略歴

ペーパー・オブジェ・フェスティバル帰国報告展

遊工房 AIR 概要

# 欧州文化首都（European Capital of Culture, ECoC）と AIR（Artist in Residence 滞在制作）活動

遊工房アートスペース・共同代表 村田達彦

## プログラムのあらし

長い歴史を持つ欧州文化首都制度の精神を与し、欧州文化首都と日本とのアーティストの滞在制作を通じた交流プログラムである。これまでの欧州文化首都に制定されている都市での現代美術についての実態は、日本ではあまり紹介されていないが、魅力的な展開が多々見られる。遊工房アートスペースでは、EU・ジャパンフェスト日本委員会の協力と支援のもと、欧州文化首都への日本からのアーティスト派遣、双方のレジデンス・プログラム間の若手アーティストの交換を積極的に進めている。ロンドン、ベルリン、パリ、アムステルダムなどで活動するアーティストに偏りがちな来日のチャンスを、他の都市を拠点とする作家たちにも広げ、彼らのキャリア・アップを支援し、このプログラムの特徴を活かし、日本でなじみの薄いヨーロッパの小都市での現代美術の理解の促進に寄与し、このプログラムを通じ培った交流をネットワークとして活用し、日本から欧州文化首都へ、日本の若手アーティストを派遣する機会を実現させ、継続的な芸術交流の促進を図っていく。

## ECOC 2014 Riga での活動

2014年のECOCの開催都市の一つは、ラトビアの首都 Riga である。この機会に、リガで開催の国際 Paper Object Festival (POF) に、日本から、和紙造形作家・柳井嗣雄と、建築家・矢嶋一裕の2名が参加した。また、リガ郊外のクルディーガにある AIR での滞在壁画プロジェクトに、芸大の工藤春也先生のご紹介で、作家・鍵岡アヌが参加した。2013年、EU ジャパンフェスト日本委員会の紹介によりリガで活躍されている Una Meiberga さんにお目に掛かり、その時の遊工房との会話が、実現に繋がった。この機会が、それぞれのアーティストにとって、旧ソ連から独立したバルト3国での貴重な活動となった。3名の活動概要と成果は以下のエッセイをご覧ください。

## 欧州文化首都との活動のきっかけと実績

欧州文化首都との関わりは、同じくバルト3国の一つであるリトアニアからの2人のアーティスト Saulius Valius と Diana Radavičute の2008年の遊工房での滞在制作・発表がきっかけとなった。翌年、ECOC 2009 Vilnius の機会に、EU・ジャパンフェスト日本委員会の支援を得て、両国のアーティストによる交流展「雨と太陽の出会いー虹の架け橋」を開催。日本から12名のアーティストと2つの文化団体、リトアニアは9名のアーティストと地元の美術館などが参画、大きな成果を残した。その翌年2010年、ECOC 2010 Istanbul の機会に、トルコからアーティストの遊工房での2ヶ月の滞在制作活動に招へい。ECOC 2012 Guimarães では、ポルトガルへアーティスト派遣、引き続き、ECOC 2013 Kosice (スロバキア) を機会に、スロバキアと日本とのアーティスト交換プログラムが始まった。2013年、ECOC 2015 予定のチェコ・ビルゼン市の現地大学 (西ボヘミア大学) が毎夏開催している Art Camp へ日本人初参加が実現。2014年は更に10名の参加枠を得て、日本の若手アーティストの海外 AIR 体験の機会を広げることになった。

## その後の展開

今後これらの交換プログラムなどを継続すると共に、これらの貴重な成果を生かし、AIR と美術大学の連携による、若手アーティストの AIR 体験の継続的な機会創出の仕組み (Y-AIR 構想、AIR for Young) 作りを目指したい。



# 紙の幻想—和紙による彫刻がリガの都市景観を変える Paper Object Festival（リガ、2014.6.27~7.20）

2014.8.20

Paper Object Festival 主宰 Una Meiberga ウナ・メイベルガ

21世紀はインターネットの普及と世界中どこへでも移動が容易にできるようになったことで、豊かな国際的な体験が育まれるようになりました。より多くの人々が異文化の人々と交流する機会が増え、これらの頻繁な交流により、異文化協力などの相乗効果により、芸術的な新しい形が生まれ、ますます多くの可能性が広がりました。21世紀のアーティストが、この環境の恩恵を得て活動するためには、新しい国際的なスキルを身につけなければなりません—いろいろな方法で、また、それらと協働して、活動する方法を見なければなりません。文化的な多様性についての問とテーマは、継続して大変重要な関心事です。文化の多様性を学んだり、経験することは、自身を文化的思考力へ導き、文化以外のほかのものと繋がることで、自身の新しい特別な能力となっていきます。

日本文化の代表として、リガの現代美術イベント・Paper Object Festival での滞在制作に、10人の日本人アーティストが参加招へいしたことは、前例のないことでした。慣れない異文化での滞在中に起こる諸事情に適應して、状況を見極め制作を進める試みは、アーティストにとってとてもチャレンジングなことでした。また、市民との関係や市民の関心は、アーティストにとって刺激的な体験であったと思います。たいへん素晴らしい事に、フェスティバルで、折紙の特別な技法を駆使して作られた作品が、ワークショップや講義で、より多く見る機会が持てたことです。一見なんということもない単純な紙が、日本の魔術師の手によって、奇跡の作品として表出しました。

建築家・ハヤシ・トモミと矢嶋一裕によって建設される古い家のための構築物—は、記念碑的で同時に静閑でした。日本の建築は、スペースを柔軟に利用することが特徴です。ラトビアでは、特に都市部の建築物からは、歴史の累積を容易に見ることができ、日本では、第二次世界大戦の空襲や天災のために、築50年余りの建築物が大部分で、風景は絶えず変わっています。ラトビアでは、変化は余りありません。日本では、特定の建物、歴史的に重要な寺院とか神社は、修復され保存されるようになりましたが、街景全体ではありません。しかしながら、バルト地域においては、木の住宅地域は文化的遺産とみなされるので大切に保護されています。このため、都市空間の歴史的で伝統的な環境は、再生され保たれています。

長らく忘れられていた Kalnciema Quarter 近くの図書館 «Sparrow» は、紙インストールをつくることによるハヤシ・トモミによる明確なコンセプトのもと、迫力ある建築物として現れました。彼の建築インストールは、美しい何かをつくることだけではなく、緊急に修復を必要とする建物に社会の認識を促しています。この機会に、我々は実験を試み、状況を読みとることを学びました。我々が介入することで、人々がどのように反応するかを興味深く観察しました。

Paper Object Festival は、リガのこのイベントで、紙についての多岐にわたる使い方を通し、材料としての紙への新しい評価をもたらしました。もうすでに長きにわたり、視覚芸術において、紙は単なる支持体としてではなく、自立した材料としての位置を確立しています。我々は、いろいろな面で、紙を見直すことができます。人は、紙の肌合いと暖かさ、強度、透明度、等々、引きも切らない様々な性質に魅了されます。もう一つは、形と柔軟性（紙を使う技術の多様性）に着目しています。また一方で、紙を非永続性のもの、可変性の材料としての興味も持って扱います。

3週間のフェスティバルの間に、異なる美学と概念の背景をもつ、ダイナミックで特別な存在感の作品が作られました。フェスティバルの全作品は、アーティストは伝統的な手法を避けることを条件に、ラトビアの地域で制作されました。—ギャラリーと他の制限された場所で。大部分のアーティストにとって、公共の屋外の環境で、紙を使用し制作することは、初めての経験でした。アーティスト自身で、2つの根本的な問題の狭間で、どちらを選ぶか悩み、決めました。—彼らは、初期の作品構想から、発想を変えました。それは、とても面白いプロセスでした。雨と地元のコミュニティの攻撃性と戦うべきであるか、あるいは、ゆっくり消えて行くためにちょうど好い作品とするべきかどうか、考え続けました。たとえば、ハヤシ・トモミの作品が地元の人々によって破壊されて、数回にわたり再構築される間に、6ヵ月の準備をかけて、7千枚の折紙のパーツから構成された、庭に在った水野久美子の立方体の作品は、人々の干渉と雨のため、2週間で消えました。

自分のまわりを知ると同時に、自分自身をよりよく知ろうということが、ラトビアにおける最近の傾向です。そのことによって、日常生活の中に美しさを見つけることができます。—人々がそのことに気づくために、遠くに行く必要がないことがわかります。人々が日常から一歩踏み出すことを奨励するために、いくつかの紙の美術品は、公共の場に一寸隠されました。植物園の高い木の上におかれた、加藤かおりの折りたたまれた作品のように。

コミュニティには、往々にして部外者を除外するという働きがあるかもしれません。しかし、部外からの働きかけは、現実的で、新しい考え方を提供し、しばしば多くの気づきを与えます。日本で、「相互互助」というコミュニティの概念は、2011年に起こった東北大震災の後、顕著に表れました。人々は、知らない人も助け、互いを受け入れるようになりました。ビジュアル・アーティスト、音楽家、建築家は、悲劇の結果を取り除き、被災地に彼らの作品を捧げました。オープンにすることで、日本のアーティストが刺激や影響を受け、その結果が、予想外の形で彼らの芸術表現に新しいアイデアを与えます。リガ・ヨーロッパの Culture Capital 2014 の日本のアーティストの作品の存在は、日本とラトビアのアーティスト両者と市民にとって、新しい機会と先例のない経験をつくりました。

文化センター Kalnciema Quarter の設立以来、私たちは、積極的に、全地域で地元のコミュニティと生活の質に確かな影響を与え、同時に文化的な遺産を保全することに貢献しました。Paper Object Festival は、およそ三万人の人が来場しました。— 東洋研究のスペシャリスト、地元の家族、若いアーティスト、ボランティア、興味を持ったジャーナリストや旅行者を含む多くの人々

Paper Object Festival の成果は、予想以上に刺激的で興味深いものとなり、オーガナイザーと市民の両者にとって美術の豊かさを楽しむことになりました。アーティストにとっても、このフェスティバルが、彼らの表現の幅を広げ、国際的な取組みのレベルを上げる機会として刺激的なものになりました。日本のアーティストの忍耐強さ、集中力、互いを尊重し、感謝する態度は、我々も学びたいことでした。お互いに、日本人とラトビア人は美的な意識と自然とともに繋がっているという点で多くの類似点をもっていると感じたことは、嬉しいことでした。是非とも継続しましょう！

日本との協力が、今後も継続できるなら、とても爽り多いことでしょう。ラトビアにとって、貴重な機会だと思えます。EU- ジャパンフェスト委員会の今後も継続したご支援を望んでおります。今年のフェスティバルで、この2つが最も成功した行事であることを強調したいと思います。第一は、折紙を材料とした美術品とインタラクティブ・ワークショップです。第二に、地域の公共の場に建築的作品を入れたことです。これらは、来年も是非続けたテーマです。

最初の Paper Object Festival は、地元の市民からだけでなく地元のアーティストからも期待が寄せられ、来年は、地元のアーティストのより一層の参加を予定しています。



## 文化交流の「窓」

柳井嗣雄（美術家、和紙造形作家）

今回の私の作品「Four Windows」を簡単に説明することから始めよう。リガ市の Kalnciema 地区には 18～19 世紀の木造建築が多く残る。私の展示場所はその一角にある建物（Paper Objects Festival の本部になっていた）の道路側の木立の下。この建物は 20 世紀初頭の木造建築で、正面に 4 つの窓を持っていた。この「窓」をきっかけに、ラトビアの文化と日本の文化が接しているという暗示的なイメージの作品にしたかった。そこで、ラトビアの特徴的な窓のスタイルと日本の伝統的な障子の透過性を併せ持つ「Four Windows」を、建物の実際の窓とリンクさせるように、オープンエアに宙吊りにした。

自分の思いを端的に相手に伝えるということは難しい。日本人どうしても上手く伝わらないのに、文化、歴史、習慣の違う外国人だとおさらだ。言葉というものも案外くせもので、話して伝わらないことが書面ですんなりと伝達できたり、その逆の場合もある。言葉の選択の仕方でも違った意味合いで受け取られたりもする。ましてや互いの母国語ではない英語でのコミュニケーションである。

ラトビア側との最初の障壁は出発までのメール通信からすでに始まっていた。ある事を問い合わせても別の質問が来たり、すぐには知りたい情報が得られなかった。たとえば単純に窓のサイズ一つにしても、肝心の外枠サイズは明記されておらず、何度かやり取りした中から、私の方が業を煮やして想像して割り出すしかなかった。私の英語力もトンチンカンなのだから。そんなこんなで時間は押せ押せになり、結局、持参すべき紙が乾燥したのは出発の前日だった。リガ到着後も不測の事態や行き違いが待ち構えていたが、その理由の多くはいまだに不明のままである。習慣の違いなのか、考え方の違いなのか、単なる誤解、判断ミスによるものか分からない。

私は内心、焦っていた。明日、Paper Objects Festival 初日を迎え、すぐその翌朝には帰国しなければならないというのに、まだ作品の設置が出来ないでいた。技術スタッフが来るまで待てと言う。何時間も待たされた挙句、今度はその技術スタッフと設置方法で意見が合わなかった。ここで議論しても始まらないので、私は雨の中、自ら木によじ登りワイヤーを張っていった。それを見ていたスタッフは納得したらしく、それからトントン拍子に事は進んだ。完成した瞬間、私はスタッフたちの尽力に感謝して思わず抱きつき感涙したほどだった。一人で完璧に出来ることはさほど多くはないのだ。

初めての他者との接触は探り合いだ。心外なことにも遭遇するかも知れない。窓を開ければ新しい風や違った空気、時には嫌な匂いが自然と入って来るものなのだ。問題はむしろ、外の空気や光をシャットアウトして、自らの窓を閉ざしてしまうこと、そしてかたくなに拒絶的な態度をとることにある。幸い、リガで出会った人々は皆、不思議なくらい美しい笑顔をもって迎えてくれた。寒くて長い冬が過ぎ、待ちに待った夏至祭りをむかえ人々の陽気な性格が一気に爆発するように開放的なダンスを踊らせたのかも知れない。

今回の私の作品テーマは、他者との境界のゆらぎ、まさに「窓」のむこうにある外の世界との関係の在りかたにあった。私たちは窓という存在を通して、あちらとこちらを自由に行き来する気体や光のように、文化や歴史や言語の違いを超えて交流し合えることを確認することになるのではないか。文化交流とは結局、言葉ではなく人と人の心を繋ぐちょっとした仕草であったり、微笑であったり、触れ合いであっていいのだ、というのが私の感想である。

ビジュアルアートはそもそも言語を介在させなくても、コミュニケーションは容易にはかれるメディアなのだ。しかし、その内側の見えないものを見せるには、「窓」を強引に開けるだけのパワーがなくてはならない。それは歴史の力なのではないかと私は考えている。国であれ民族であれ個人であれ、内包する歴史の力は他者にとっては非常に魅力的なコミュニケーションツールなのである。リガではいたる所でそのパワーが私の「窓」を開き、新しい空気が流れ込むのを感じた。本当の交流はこれからというところで短い滞在期間は終了となった。

総合ディレクターの Una Meiberga 様をはじめスタッフの皆様、関係者の方々のご尽力に感謝します。今回の Paper Objects Festival に参加した作家、紙の作品が、文化交流の「窓」を開けて世界を繋ぐきっかけになれたことを嬉しく思っている。





## ペーパー・オブジェ・フェスティバルに参加して

矢嶋一裕（建築家）

ペーパー・オブジェ・フェスティバル（以下 POF）は、バルト三国の中央に位置するラトビア共和国の首都リーガで開催された紙の展覧会です。会場は旧市街からダウガヴァ川を渡った19世紀中頃から20世紀初期に建てられた木造建築が数多く残るパラダガヴァ地域で行われました。この展覧会を主催したのはパラダガヴァ地域で様々な文化イベントを企画・運営するカルンツィエマ・クウォーター（以下 KQ）です。KQは6棟の木造住宅をリノベーションし、カフェやイベント会場、ギャラリー、レストラン、ショールーム、オフィスが中庭を囲むように配された複合施設です。毎週末に中庭でマーケットが開催されるなど、公共に開放された地域に新たな魅力を作り出しています。POFでは、KQのウナ・メイベルガ氏がキュレーターとなり、9名の日本人アーティストが招聘され、パラダガヴァ地域に点在する7つの場所で作品が公開されました。

扱う素材が水に弱い紙であるにも関わらず、作品を外部に展示するというのがこの展覧会の特徴です。これは、メイベルガ氏が「現代アートという手段を使ってパラダガヴァの都市環境に影響を及ぼすことが展覧会の狙い」と語るように、ギャラリーのような閉じられた空間ではなく、都市に開かれた展覧会を自論んだことによりです。紙にとって屋外という環境は容易なものではありませんが、むしろ屋外に設置することで直射光による陰影の鋭さや透光した紙の美しさ、風雨に曝されることによる紙そのものの強さやはかなさを再認識することが期待されました。

私の作品「Paper Windowscape」は、窓に着目したインスタレーションです。窓に障子のようなスクリーンを取り付け、展覧会期間中の夏の陽射しをコントロールしようとする試みです。この建物は十字路に面した角地に立地しており、様々な角度から建物を眺めることができます。三角形平面の一面のみにスクリーンを設置することにより、一方からは障子が見えますが、踵を返し振り返ると障子は見えず窓が見える仕組みになっています。建物の廻りを歩き回れば、建物をみる角度により光景（シーン）が変化するインスタレーションです。レクチャーでは日本の建築空間についても話してほしいという要望があり、そこで私は「窓」と「間戸」の違いを自作に絡めてレクチャーしました。

「窓」とは壁に穿たれた穴のことです。建築の構造形式が組積造である西洋の「まど」は大きな開口を空けることができないため「窓」となります。私が作品を設置した建物は19世紀中頃から20世紀初期に建てられた木造建築であり、世界遺産にも登録されています。木造といっても日本の木造とは違い、木を組積した構造となっています。日本ではいわゆるログハウスと呼ばれる構造形式です。つまり、パラダガヴァ地域の木造建築は西洋の伝統に基づく建築であり、その「まど」は「窓」ということになります。ラトビアでは木がたくさん取れることもあり、石造に移行せずにこのような建築が建設されたという事情があるようです。同じ木材を使用しながらも、日本の木造と構造形式が異なることは大変興味深いことでした。

その一方で、日本の「まど」は木造の柱・梁によって囲まれた「間」にはめ込む「戸」が起源であり、障子や雨戸も「間戸」として発展してきました。日本の住まいのひとつの系譜として、中国から伝わってきた高床式住居が上層階級の住まいとして発展し、平安時代には寝殿造と呼ばれる定形となります。ここでは蔀戸と呼ばれる跳ね上げ式の板戸が用いられていました。蔀戸の難点は、光を透過せず昼でも隙間から差し込む明かりのみで暗いこと、冬は寒い風が蔀戸を下ろしても隙間から入って吹き抜けることにありました。そこで、日本の住まいは蔀戸に代え、薄い板製の舞良戸と障子に進化してきました。舞良戸は引き違い式で上端下端とも溝にはまり防風性が向上します。また、障子は風を遮るが明かりだけは取り込むことが可能になり過ごしやすくなりました。このように蔀戸から発展した舞良戸と障子は、居住性の向上と建具への紙の適用という興味深い事例となります。これらが直接、私の作品を説明することになりませんが、このレクチャーを機会に「窓」と「間戸」の違いについて考えられたことは有意義なことでした。

リーガでは、キュレーターのウナさんをはじめとするスタッフのみなさんのおかげで素晴らしい時間を過ごすことが出来ました。また、東京で知り合ったナタリーさんに再会し、旧市街やユーゲンシュテールの建築をご案内いただき、KQのリノベーションも手掛けた建築家のリーネさんにはリーガの現代建築を案内していただきました。そして、参加アーティストのみなさんとの交流も楽しく、今後もお互いの活動を尊重しながらも刺激し合えるような関係が続いていくことを望みます。最後になってしまいましたが、このPOF参加へのきっかけを与えてくださった遊工房の村田ご夫妻には大変感謝しています。このように思い返すとPOFへ参加したことで多くの方たちに出会えたことが私にとって素晴らしい財産であり、今後も大切にしていきたいと思えます。





## Kuldiga Aritsts' Residence Gallery における壁画プロジェクト

Ilze Supe, Manager, Kuldiga Artists Residence

クルディガ（ラトビア）に珍しい建物があります。このユニークな中世の建築物は、町の建物としてそんなに古くはありませんが、ユネスコの世界文化遺産リストにあり、町の誇りとなっています。この建物は地元の建物の美しい地域にあるというより、むしろ明らかに、町の最も重要なスポットになっています。

このプロジェクトは、建物再生の物語です。数年間、無人で放置され使用されていなかった建物は、今クルディガアーティストのレジデンスとアートギャラリーに改装されています。このプロジェクトの場所の一階部分は、将来、AIR プログラムに参加するアーティストのためのアパートに変わります。それらの古い部屋は改装され、独立した4つの部屋は、4人の画家に手渡されます。どの部屋のどの壁面も、芸術表現のためのキャンバスになります。- 壁、天井、床。街の景観はたいへん素晴らしく、風景画を描くアーティストたちを常に引きつけてきましたが、このプロジェクト（大方のクルディガのアーティスト・レジデンス）の狙いは、新しい表現芸術を取り込み、文化に優しい町としてクルディガを印象づけることです。- 思い切った革新の促進剤としての現代美術。

このプロジェクトは、プロのアーティストによってクルディガでの AIR プログラムと展示会のスタートを意味します。したがって、プロジェクトには二重の意味があります - それは高水準のアート・ショーと展示だけを意図しているのではなく、野心的な芸術のための発信基地は将来クルディガになることを期待することです。（さて、はい… 将来を夢見ることは、常に賭けのようだと考えますが、... しかし、それにもかかわらず夢を見続けます…）。

現実的には… 建物の一階は、2014年5月の間、建設中になっています。

2014年夏、初展示のための、広々としたアー・ギャラリーになり、- 2014年6月には、プレイベントとして、国際芸術アカデミー（ラトビア、リトアニア、フィンランド、スウェーデン）の学生が、夏の外光という展示をしに来ます。

一階の部屋は、現在かなりの荒れた状態です。Residence の改築資金を集められれば、部屋の準備ができ、このプロジェクトが実現します。- そして白い壁と天井ができます。このプロジェクトによるアートワークが部屋を装飾している建物が、アーティストのためのアパートとして使われる予定です。

2014年6月23日までの建物の修復が不可能なら、美術作品が建物が再建されるまで残り、プロジェクトは短い実験的ものとなります。





## クルディーガアーティストレジデンス

鍵岡 リグレアンヌ

バルト三国の一つであるラトビアの首都・リガから車で約2時間の所に位置する、クルディーガという自然豊かな小さな町で、11日間の壁画制作レジデンスに参加しました。今回のプログラムは、長い間使われなかった建物をリノベーションし、将来的にアーティストレジデンスの拠点を作るという過程で、4人のアーティストに一人一部屋ずつ割り当てられ、壁画を施すというものでした。

このプログラムに参加するにあたり、事前に建物や壁面の写真を頂き、その部屋が今後クルディーガに来たアーティストの居住空間になる場所であることや、改装の進行状況、壁の状態などの情報も得ることが出来ました。施せる壁画の大きさは自由とのことだったので、実際に描く題材や大きさは現場で決めようと考えていました。

クルディーガに到着した翌日、リガ、エストニア、そしてフランスから来た3名のアーティストと、今回のレジデンスプログラムのスタッフと共に制作する現場に向かい、制作部屋を決定した後、町の散歩を行いました。建物のすぐ近くには、大きな川ととても広い滝があり、更に小川が家屋の間を縫うように流れていました。クルディーガという町は、「ラトビアのベニス」と呼ばれるほど水が豊富な町であることを知り、以前から自身の制作で扱っている「水面」をテーマにすること決めました。また、制作する壁の表面が、風化により所々剥がれ落ちて、その形状が水面の反射によく似ており、その形や質、壁の厚みの差を利用しようと考えました。

私にとって初めてのアーティストレジデンスだったので、全てが新鮮であると同時にとても刺激的な毎日でした。他の3名のアーティストは、国際的に活躍されている経験豊富な方達で、作品についてはもちろんのこと、ギャラリーやビエンナーレ等での展示について、や、国ごとの美術環境、今後の活動のことなど本当に多くのお話を聞く事が出来、国の異なる作家との交流はとても得るものが多いと感じました。特に私は学生を終えたばかりという状況だった為、プロのアーティストとして活動していく上で大変なことや、常に心がけていることを直に教えてもらえたことは、とても良かったです。

このように、水と緑に囲まれながら、興味深く楽しい話を語り合う環境の中で、壁画制作を進めていきました。3年前前から油絵と並行してプレスコ画の研究もしており、大きな壁面に絵を描く事は何度かありましたが、今回は幅4メートル高さ3メートルの大きさを1週間で描きあげないといけなかったため、計画性とスピードが必要とされました。レイヤーのように色ごとにアクリルペンキで塗り重ねて、水面の様子を表現していきました。レジデンスのスタッフの方に制作過程や制作風景の写真を撮っていただき、また、ラトビアのローカルテレビ局の取材、美術関連サイトに記事を載せていただくなど、町をあげてこのレジデンスプログラムをサポートしてくださっている印象でした。

最終日は、オープニング Show があり、リガ在住のアーティストや、美術関係者、町の住人など、沢山の方々が見に来て下さいました。壁画制作というのは、クルディーガでは初めてのことであったようで、皆興味深く鑑賞していました。また、4人のアーティストそれぞれの題材と作風が全く異なっていた為、その違いを見るのが面白いという方もいらっしゃいました。作風というのは、それぞれの作家が違って当たり前ですが、国の違いというのも理由の一つなのではないかと私は思いました。各々の母国の文化や色味というのは自然と出てくるものかもしれません。

また、ギャラリースペースに絵画が展示されている場とは違う、壁画独特の雰囲気や味わうことが出来、部屋ごとの世界観を体感することが出来るので、制作した私たち4人も結果に満足していました。やはり、作るだけでなく、結果を人に見せることで学ぶ事柄は本当に多く、鑑賞者の反応を通して自分の作品を客観的に判断することが可能であることを改めて感じました。そしてなによりも、ラトビアの人に作品を見せることは私にとって初めてだったので、現地の方やリガで活動している作家の方に率直な感想や意見をいただけて嬉しい限りでした。

今回の滞り制作で、その場の自然環境や地域性を取り入れた作品を作れたので、アーティストレジデンスの良さを最大限に経験することが出来ましたし、大きな壁を前にして、普段一人で籠って絵画を作るときにはない自由さや開放感も得ることが出来ました。そして、ドイツやロシア等、様々な国の影響を受けて来たラトビアという独特な美術文化を感じる国で、自分の作品を壁に残すことが出来、この経験が今後の自分の活動の大きな励みになることは間違いないと感じています。







## Paper Object Festival 2014 — 欧州文化首都リガ報告展 —

2014年9月20日(土)～9月28日(日)

\* 22日および23日休廊

12:00-19:00 (初日は17:00から/最終日は17:00まで)

オープニングトークイベント9月20日(土) 18:00 -

オープニングレセプション9月20日(土) 19:00 -

### ■ 出展作家

- ・ハヤシトモミ (建築家)
- ・加藤かおり (アーティスト)
- ・矢嶋一裕 (建築家)
- ・柳井嗣雄 (美術家、和紙造形作家)

### 遊工房アートスペース Studio2

〒167-0041 東京都杉並区善福寺 3-2-10

TEL : 03-5930-5009 FAX : 03-3399-7549

<http://www.youkobo.co.jp>

2014年6月27日から7月20日までラトビア共和国のリガで行われた Paper Object Festival (POF)。参加した4名の作家による、成果報告展を開催します。リガではかつて製紙工業が盛んであったことから、紙を使った作品を展示する POF が開催されました。

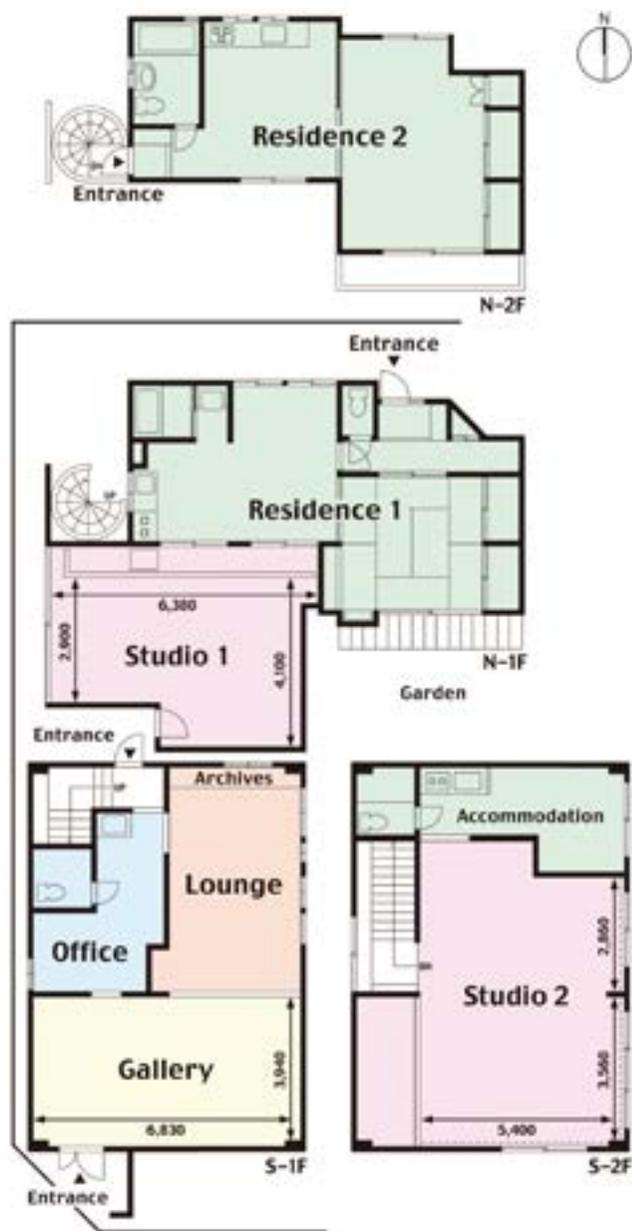
POF は欧州文化首都 2014 の公式プログラムのひとつでした。

POF 参加を通して何を心得、そして何を思ったのか。

作品写真やモノを通じて語りかけます。

### ■ オープニングトークイベント : 2014年9月20日(土) 18:00 -

作家によるプレゼンテーションとディスカッションを行います。エストニア在住のハヤシトモミ氏もスカイプで参加し、リガでの活動をあらためて振り返ることにより、その活動の相対化と今後の展望をお話します。



## 遊工房アートスペースのなりたち

遊工房アートスペースは、1980年代より美術教室、彫刻アトリエ、アニメーションスタジオなど、様々な美術活動の「場(スペース)」となりました。1950年代から80年までは、診療所兼療養所として使われていましたが、時代の変遷と共に姿を変えました。2001年、さらに活動を充実させるため、主に現代美術の発信を目的とするギャラリー、創作スタジオ及び滞在施設を備えたアートの複合施設として生まれ変わりました。グローバルなアーティストとの交流や、地域に根ざした芸術活動の場となり、同時にアーティスト・イン・レジデンスも本格化し、着実に歩みを重ねています。

ギャラリーは、近年では珍しいリベット工法の鉄骨が露き出しになった高い天井のホワイトキューブの快適な空間で、隣接したラウンジは、交流とアーカイブ資料閲覧のスペースです。また、併設の創作スタジオ及びアーティスト・イン・レジデンスもご利用頂けます。これまでに、20ヶ国200名余りの海外からのアーティストが滞在し、活動を通して新たな経験を積むとともに、200名を超える国内外の若手アーティストを中心とした展覧会が行われています。(2014年3月現在)

東京・杉並区の西北に位置し、近隣には、都立善福寺公園、井草八幡宮、善福寺など、緑豊かな環境が残り、都心までのアクセスも良好です。ご利用など、詳しくはホームページをご覧ください。



〒167-0041 東京都杉並区善福寺3-2-10  
 Phone: 03-5930-5009 Fax: 03-3399-7549 E-mail: info@youkobo.co.jp

**youkobo**  
ART SPACE